

自壊する帝国、世界にのさばる身体

——松浦理英子「肥満体恐怖症」論——

泉谷 瞬

一 女子プロレスラーの身体とセックス・ギャング・チャイルド

エッセイ集『優しい去勢のために』で松浦理英子は、「かつての女性解放運動家も小説家・批評家も少女漫画家もなし得なかった自由な精神の表現」を、女子プロレスの世界に見ている。たとえば一九八五年に一大ブームを巻き起こしたライオネス飛鳥と長与千種によるタッグ「クラッシュ・ギャルズ」について松浦は、次のように解説してみせた。

〈社会に規定された女性性〉を、二十二歳の飛鳥と二十一歳の千種は越えようとしているのである。二人が言おうとしているのは、「強くてカッコいいのは男で弱くて可愛いのが女だとされているけれど、女が強くてカッコよくたっていいじゃない」ということなのだ。^①

松浦の女子プロレスに対する関心は、主に二点に集約されている。一つは、プロレスの試合で繰り広げられるパフォーマンスを含めた、闘いの風景への関心である。後年に松浦は、プロレスラーが観客に突き付ける光景と「〈真実〉」の語られ方を比較し、「〈真実〉」に依存することなく、見え方、見せ方によって生々しさを描き出そうとする」という点において、プロレスを「高度にフィクショナルな技法^②」と定義している。こう

した認識は、プロレスをエンターテインメントとスポーツの中間点に置き、その卓抜した演出性を評価する研究の視角とも通じるものだろう。

「虚構」に対する作家としての位置取りも窺えそうなこの議論も興味深いものであるが、本論が着目するのはもう一点の関心——「豊かな脂肪をたくわえた優美なファイターたちの超女性的な肢体」、「新しい女性たちによる明るい怒りに満ちた筋肉と脂肪の饗宴^④」といった絶賛を生んだ、女性身体に向ける眼差しの方だ。次に引用する文章は、八〇年代後半に、先述の「クラッシュ・ギャルズ」と対立したヒール軍団「極悪同盟」で活躍を見せた女子プロレスラー・ブル中野の身体を、松浦が記述したものである。

昨年の夏にこの素敵な少女を発見して以来私は夢中である。百七センチの身長、八十五キロの体重、豊かな脂肪の内に鍛えられた筋肉をひそませた女子プロレスラー独得の体つきは、ゴージャスでパワフルで、男性性を志向してもいないし男性と対比した上で導き出される女性性の規格からもはみ出しており、超女性的で滅法セクシーだ。さらに、無闇に可愛らしい。(略)／注目すべきはブル中野の見るからにデリケートな皮膚の下で無邪気にたゆたう贅肉と脂肪だ。無邪気にと書いたが、そう形容せずにはいられないほど大らかにナチュラルに贅肉と脂肪がたくわえられている。肥満、ではな

い。肥満などという病んだ状態を示すことばは健康なブル中野には当て嵌められない。言うならば、幼児が発育途中で一時的に太るようにブル中野は太っているのだ。^⑤

エッセイ集『優しい去勢のために』のタイトルは、社会通念上において自明的に成立している「性器」——生物学的に区別され、男女間の性行為・生殖行為に用いられる意味での「性器」の感覚に対する批判的な思考から形成されている。「常に他性の性器を意識し、行為中でなくとも想像上の他性器を身にまとった、それ自体が架空のものと言っている性器」を「優しく」去勢するために書かれた散文の結語で、松浦は「性器」によらない快楽を愉しむあなたとわたし、「わたしたちの属する性を（セックス・ギャング・チャイルド）と呼ぼう」と名付けている。つまりここからは、本書における思想的課題の核を成す概念こそが、「セックス・ギャング・チャイルド」であることが承知できる。すると、ブル中野に「性器に基づく性別を被せるのは無意味」と断言し、「ヘリオガバルスからジャン・ジュネ、プリンスに至るセックス・ギャング・チルドレンの系譜にブル中野もまた名を連ねる」と称賛する行為は、作家が理念的に描いた女性身体について、我々に一つの示唆を与えるものだろう。

このように八〇年代を通過した松浦は、女子プロレスラーの身体にある種の可能性を看取するに至るのだが、しかし時期的な理由によりそうした関心が強くなる以前^⑥に執筆されたと考えられる初期作品に「肥満体恐怖症」^⑦が存在する。先にも引用したように、かつてブル中野を評した文章において松浦は「肥満」を「病んだ状態を示すことば」と一蹴し、「健康なブル中野には当て嵌められない」としていた。

だが、八〇年六月に書かれた「肥満体恐怖症」は明らかに「肥満」という性質に対する何らかの畏怖・敬意が充満した物語と読むことができ

る。この違いは矛盾や認識の変化という言葉で済ますのではなく、むしろエッセイと小説という双方の文章表現に期待される様式の違いとして理解した方がいいのかもしれない。すなわち、先のエッセイでは、読者の誤読を避けるため一般的に使用される意味合いで（負の印象が付与された）「肥満」の一語が使われていたが、日常的に流通する言葉の意味を相対化し得る小説では、「肥満」にまつわるそうした負の用法が払拭される可能性を汲み取るべきだろう。また、「性を通さずに女体を描きたい」という実験の一つが「肥満体恐怖症」であったことも後に作者自身によって明かされているが、松浦の関心が女子プロレスに焦点化していく以前、「肥満した女性身体」はどのように表象されていたのかを分析する作業は、作家の問題意識を探る上でも、そして同時代の女性身体が置かれた位相を考察する上でも重要である。

本論では以下、作品に関する先行研究を整理した後、同時代状況との拮抗関係を物語より拾い上げていく。具体的には、七〇年代以降に浸透するダイエットや、フィットネス、ボディビルの流行などから女性身体の社会的な配置を検討し、さらに同時期において萌芽した国家的な健康増進の動きについて触れる。それらが発展的に統合された「健康美」をめぐる個人的な欲望と、国家の要請する身体が一致していく現象に、本作を分析するにあたって有効な補助線が隠されていることを説明する。最後にこうした背景のもと、作品が提出した身体がいかなる可能性をもたらすものか、主人公の語りにおける特徴を踏まえて論じていきたい。

二 太らないための食事

本章ではまず「肥満体恐怖症」の先行研究を繙き、問題点の整理を行う。荻原雄一は、本作に登場する先輩集団のリーダー格である水木を、

語り手・志吹唯子と対照的な「完全なるサディスト」と位置付け、結末の展開を「唯子の一人芝居が終わり、水木との間に完全なサドとマゾの関係が成立する」と見なしている。自我を死に至らしめられた唯子が「マゾ的な快感を甘受」^⑩するという読解は、松浦の作品において度々言及される「S M的」な関係性の出発点を本作に由来させるため、かえって単調な結論に帰していることは否めない。そのような方向性に尽きるならば、本作の「肥満体」は、登場人物の差異を明瞭にさせるだけの要素としてしか働かないだろう。

次に与那覇恵子は、唯子が太った女性に対して覚える恐怖症を、「産む性」である女への恐怖」と解釈する。唯子の理想が「何者にも捕われない聳立した身体」にあると捉え、しかし物語結末で噴出する「心地よさ」によって唯子が「母との一体感を取り戻し」、「癒着する身体となってしまう」^⑪という論理は、肥満体が想起させる視覚的イメージと妊娠した女性の身体的現象を等置させる点で、一定の有効性を持つと考えられる。ここへさらに加えるならば、唯子がタバコの味を好ましく感じている箇所について、母親の乳首を吸う「代償行為」として大人の喫煙を理解するデズモンド・モリスの意見などを援用することも可能であるかもしれない。

さらに近年では山崎眞紀子が、母を失った唯子が周囲との関係を母とのそれに見立て、「母と同様の豊満な肉体の水木に「愛して」と切願し、その肉体に包まれることであたかもエクスタシーを感じているように読める」^⑫と、物語設定の詳細に即した分析を行っている。「肥満体」のことを、妊娠し、子を産む身体と結び付ける点で与那覇の論と基盤を共有したものである。だが、これらの結論には同時代的な女性身体への眼差しを挟む余地が無いところから、一義的な解釈が容易になってしまうことも確かではないだろうか。仁平政人は直接的に言及してはいないものの、

「肥満」を妊娠した女性のメタファーと見なし、「産む性」である女性身体への嫌悪を見出すような見解」について、「女性を「産む性」として強固に意味付けるこのような視点は、（性を生殖との関係でのみ理解するような思考と結びついているという点で）松浦的な問題系に反しているように見える」^⑬と述べつつ、作品解釈の複数性を強調する。

仁平は、与那覇たちと同様に物語の結末に注目しながらも、水木の肉が唯子に覆い被さった際の感触を、「単に乳房・口唇といった局所的な関係に留まることのない、〈肥満〉という形象と結びついた全身的で奇妙な〈愛〉の体験」と呼び、「生殖を規範とする異性愛主義」^⑭とは別の流れを作品より見出している。この主張の妥当性に本論は異議を唱えないが、しかし論点が女性身体ではなく性愛の関係に移行した点を振り返れば、むしろ本作の女性身体に含まれる複数性の問題は残されたままとも言える。もともと、仁平はその点についても目配りを怠らず、水木が風呂場で披露した身体の箇所を「唯子の〈肥満体恐怖症〉の物語に回収されることのない強度」^⑮と指定している。このように先行研究において未だ論じ尽くされていない女性身体を、本論はあえて時代背景と関わる具体性のもとに読み進めていく性質を持つと言えよう。

最後に近藤周吾は、本作の語りに注目したという点で、これまで挙げた論とは異なる傾向の解析を見せており興味深い。唯子の一人称で語られた物語に点在する欺瞞を拾い集めることで、「唯子の自画像と他者から眼差された唯子像との間に決定的な隔差がある」^⑯として、その語りの戦略性を認める近藤の指摘は、虚構の表現である小説の形で「肥満体恐怖症」が執筆された意義を改めて可視化させるものである。

以上、やや丁寧に先行研究の整理を行ってきたが、本論はこれらの論点を視野に入れた上で、同時代的な情報を注釈し、「肥満体」の多義的な解釈を試みたい。それにはまず物語内の時代設定を考慮する必要がある

ため、次のように簡潔に推定しておこう。先輩たちに閉め出された唯子が夜を過ごすための場所として候補に挙げた「二十四時間営業のドーナツ屋」(八二頁)のようなファースト・フード店が日本で営業開始をしたのは、ダスキン社が経営するミスタードーナツの一九七一年四月が初であるから、時代は当然これ以降であると概算できる。次に、作中で頻出するタバコの内、最も発売日が遅い銘柄は「キャビン」の一九七八年四月であり、これらのことから作中の時代設定は、初出が発表された一九八〇年とほぼ同時期であると考えてよい。それでは七〇年代から八〇年にかけて、日本社会では身体がどのように語られ、位置付けられていたのだろうか。

「肥満体」に沿ったところから始めてみると、七〇年代とはダイエットの文化が発達した時代であった。ダイエット・ブームが高度消費社会において促進されることは各所で論じられているが、日本もその例外ではない。たとえば「砂糖は太る」という一般的な構図に従うならば、それを回避するためには二つの方法が採られるだろう。一つは「砂糖自体を摂取しない」ことであり、もう一つは「太らない砂糖を摂取することだ。

一九七三年には早くもダイエット専用の食品が各企業によって開発され、消費の波に乗っていったことが、「やせたい、太りたくない、という女心」と報道された。この二年後の一九七五年三月一〇日には、日本初の低カロリーコーラ「ダイエットペプシ」が発売される。それは一九二ミリリットルの瓶一本において従来のカロリーが八五であったものを、半分以下の三九にまで減じてみせた²⁰⁾。また、七四年八月にはアメリカの医学博士L・メルヴィン・エルチングとセイモア・アイゼンバーグが考案したダイエット法『あなたは永久に肥満から解放される』(鶴本等訳、インターナショナルタイムズ)が翻訳、発売されている。この本に掲載され

た内容も主に食事改善による瘦身であり、発売当初の七四年から約八年間に渡り、『読売新聞』に広告が不定期掲載されていたことは、日本社会におけるダイエットへの関心の高まりを裏付けている。

こうした背景の積み重なりによって、八〇年六月に鈴木その子がベストセラーとなる著書『やせたい人は食べなさい——減量常識を破る奇跡の鈴木式』(祥伝社)を刊行し、世に登場した事実が存在する(晩年は美容研究家として名を馳せた鈴木は元々、レストランのオーナーであり料理研究家の肩書で活動していた)。挑発的なタイトルの真意は、白米を基礎とした炭水化物の摂取を奨励する代わりに、高タンパク・高脂肪の食物を避けるというものであった。

以上の情報から判断できるように、七〇年代前半に端を発するダイエット・ブームの一つには、まさしく「食」からの接近があったことが理解できるだろう。この観点から、作品に書き分けられた「食」の要素を見ていきたい。

唯子と水木たちは同じ寮で生活しているため、必然的に食事と一緒に取る機会が多くなる。だが、「肥満体」の脂肪に連なっていくような肉食や、脂質を多く含んだジャンク・フードに類する食べ物に、唯子は否定的な感情を抱く。自分の取り分に関しては「パン」と明記されるにもかかわらず、水木たちの食事風景は唯子にとって次のように認識される。

大女たちが澱粉やら蛋白質やらをぐいぐい押し込んでいる。三人は義務感に追い立てられるかのように、味わいもせず、補給するだけと言うのがふさわしい食べ方をした。眼で見なくとも、彼女たちが「食べている」気配は濃厚に伝わって来る。それだけで唯子の食欲まで減退してしまう。(九二頁)

水木たちの摂取する食べ物には「澱粉」や「蛋白質」といった栄養素・化合物の集合体に置き換えて表現される。「補給」という動作からもやはり、唯子がこの三人を人間的な存在と見なしていないことが了解できよう。「肥満体」の一部分を「ロースハムのブロック」(八五頁)と喩えたり、嫌味を呟く時に「豚みたいに」(九二頁)といった言葉を用いたり、肉食に対する嫌悪感はとりわけ強く浮き出ている。また、水木たちと部屋でトランプ勝負をする際、用意された菓子類をほぼ強引に食べさせられることは、唯子を十分に苦しめる要因の一端でもある。その反動として彼女は、三人が食い散らかしたそれらを指して「肥満体の女たちの排泄物である」(一〇三頁)と痛烈に非難してみせる。徹底的に高カロリーの摂取を排除する同時代の熱狂を嘲笑うかのような水木たちの食生活は、このようにして唯子の食物に対する憎悪を誘発していくのである。

三 「健康美」を体現する身体

だが、この時代のダイエット・ブームを牽引したものは、当然ながら「食」の要素のみではない。「食」が身体を形成する外側からの改革であるならば、それと並行する形で訪れた次の改革は、身体の内側からその統御を目指すこと——すなわち、日常的に実施可能なスポーツに代表される「運動」であった。

七〇年代後半、日本でもスポーツと健康の一大ブームがまきおこった。このときもアメリカからやってきたスポーツがブームの火付け役である。アメリカではすでに六〇年代から都市化による運動不足が問題化し、国をあげての健康・体力づくり運動が始まっており、医学や体育学などに基づいたさまざまな研究が進行していた。

(略)この風潮はすぐに日本に伝わり、ジョギングやフィットネスへの関心が高まっていく。²⁴⁾

「食」や「運動」どちらの点においても、「健康的な身体」への関心がアメリカから輸入された点は極めて興味深いが、ともかくこれ以降八〇年代を跨ぎ、ダイエット・ブームはメディアによって大いに喧伝されていく。²⁴⁾「肥満体恐怖症」は、まさにその渦中における女性同士の身体をめぐる物語なのであり、唯子という人物が「肥満体」に恐怖の感情を抱くことを、こうした時代状況と隔絶されたものと捉える方がむしろ不自然ではないだろうか。

無論、社会的に要請された女性身体の反映としてのみ小説を位置付ける行為は、かえって文学作品を読むことの意義を失わせる。本論が指摘したいのは、社会的に良きものとして配置された女性身体(健康的な身体)を、作品が裏返していく可能性である。そして、その可能性の候補として挙げるべき箇所は次の描写以外にはありえないだろう。

そのポーズのつくり方はモデルのそれでもなければ、俳優や舞蹈家のものでもなかった。自身の体の特質を隅々に至るまで心得尽くした上で、体を捻ったり折ったり伸ばしたりして肉によるフォルムの組み立てを行う。痩せた体では行えない芸当だった。たるみや贅肉の贅をも巧みに利用するのだから。／捻られた胴体に刻まれた深い線が体のひと振りでも振られ、飛び出した骨とすり替わる、さつき瘤のように腰骨の上に盛り上がった贅肉は、次のポーズを取った時には平たく消え失せ本来の体の曲線になじんでいる。筋肉を浮き出させていた腹部が立てた足に隠されると、丸太のような腕に力が蓄えられている。水木は随所の肉を自由自在に操って、大蛇になり海蛇

になり鯨になり亀になった。(八九・九〇頁)

風呂場で水木によって自信満々に行われたこのポージングの連続を、唯子は「ボディ・ビルディング」と呼び、「批評からも感動からも離れた所で純粹に見ることだけを強いる」(九〇頁)と述懐する。「健康的な身体」を目指す「運動」のブームに重なり、女性のボディビルが日本で隆盛の兆しを見せたのはちょうど八〇年の後であり、この単語が書き込まれた本作の反応は、むしろ流行を予見していたかの如く一足早いものであった。しかし、現実の女性たちが取り組んだボディビルと、「肥満体恐怖症」の水木が見せたボディビルの性格が、あまりにかけ離れていることには注意を要しておきたい。

日本の女性ボディビルを説明するにあたっては、西脇美智子の存在を外して語ることは不可能である。実兄でもあるボディビルダー西脇清昭の奨めにより、素人同然の状態からトレーニングを始めた西脇は、一九八〇年六月に開催された第九回日本パワーリフティング選手権大会五二キロ以下級で初出場三位を獲得している。さらにその三ヶ月後、日本ボディビル実業団健康美コンテストにおいて優勝したことで、マスコミから大きな注目を集めた。以降、「女性ボディビル界の先駆者」と呼ばれ、女性週刊誌では西脇を指導役に据えたトレーニングの具体的なガイドが掲載されるようになる。特徴的であるのは、西脇が強調し、マスキも飛びついた点が、ボディビルによる筋肉の鍛錬ではなく、「健康美」であったことだ。西脇は自著で次のように述べている。

ボディビルはただ単に筋肉を鍛えて強くするばかりでなく、ボディビルのトレーニングをすると筋肉の緊張度が増し、全身の筋肉の形が整ってきてスリムで美しい体を作れるという美容効果が、

はつきりと実証されるようになったのです。／こうして、強い肉体を作る効果から、鍛えられた「美しい肉体」を作る近道として、ボディビルは、今、全世界の女性たちから熱い注目を浴びるようになったのです。²⁸

元々はアメリカのウーマンリブにおいて、肉体的な強さを求めた女性たちによる活動の一つであったボディビルが、やがて女性身体美容効果を維持する方法として取り入れられたことを紹介し、ハリウッドで人気のジェーン・マンズフィールド、マリリン・モンロー、ラクウェル・ウエルチ、ポー・デレク、ファラ・フォーセット、ジェーン・フォンダの名を、いずれもボディビル経験者として挙げる下りには、資本主義社会における女性身体複雑な状態が埋め込まれている。これには荻野美穂による次のような見解が参考になるだろう。荻野は、フィットネスやボディビルによって作り上げられた七〇年代以降における「女性美」について、「たとえスリムであっても、弱々しさよりも意志的な力強さを発信しようとしているともいえる」と述べながらも、「細さ≡若さ≡美しさ」という等式自体は動かないし、理想のからだを手に入れ維持するために、女たちに運動や食事管理などの厳しい努力と禁欲が要求されることにも変わりはない²⁹と、その両義性を看破している。こうした分析を踏まえるならば、一義的な「美」の序列を形成する断片として女性身体鍛錬が回収されてしまった経緯が見えてくる。すると松浦理英子が、女子プロレスラー・ブル中野の身体と比較する形で取り上げた「アメリカの女性ボディビルターたち」に対して、「脂肪を取り去り筋肉を増強する彼女たちが、寝呆けたスノップの褒めるように男性と女性の身体的差異を可能な限り消去して両性間の距離を縮めるなどといった成果を上げていくわけでない³⁰」と辛辣な批判を寄せたことは、このような文脈を顧み

るならば当然だったのかもしれない（そこから「肥満体恐怖症」における水木の仕草をあえて「ボディ・ビルディング」と表記する態度を推しはかることも、あるいは可能だろう）。

だが急いで補足しておく、本論の眼目は同時代における女性のボディビルと、それに励んだ人々の個人的な方針を批判するところには無い。本論がここから目指すのは、たとえばボディビルのような「運動」に依拠して健康的な身体を作り上げるといふ、一見個人的なものとして映りかねない欲望を、社会的な視点で相対化する作業である。

そもそも身体を鍛え上げる行為を、個人的な嗜好とのみ捕捉することは難しい。谷内田浩正は、一九世紀末から二〇世紀初頭における欧米で、J・P・ミュラー、エドモン・デボネ、ユージン・サンドウといったボディビルダーたちが先導した「身体文化」の大衆的な広がりと、それに影響されたフランツ・カフカや夏目漱石の記録を追跡する論考の中で、国家のイデオロギー装置として作動した「兵式体操」と、サンドウたちが示した「商業主義的な個人体操」が、生存競争を生き延びるための「適者」を生産するという同一の論理に奇しくも収束してしまう道筋を発見している。

身体管理のイデオロギーはたんに政治的権力によって、上から下へ向けて発せられたばかりではなかったのである。ミュラーが、デボネが、そしてサンドウといったボディビルダーたちは、何も国家的な要請にしたがって、自分たちのそれぞれのプロジェクトを開始したわけでは、もちろんない。帝国の時代のただなかにあって、彼らはみずから進んで、個人の身体の鍛錬こそが国体の強化につながるという信念を、何ら疑うこともなく実行に移していったのである。ボディ・ビルディングがただちにネイション・ビルディングへと転

じ、また逆にネイション・ビルディングがボディ・ビルディングとどうかちがたく緊密に結ばれていたこの時代こそ、帝国主義の時代³¹と言えよう。

谷内田は続けて、こうした帝国主義のイデオロギーが、「強者という「適者」(the fit)の存在を正当化すると同時に、弱者という「不適者」(the unfit)の排除を正当化する原理」である社会ダーウィニズムを招く事態を見抜き、その帰結として「優生学の網目から溢れおちてしまった不適者をもれなく回収し、健全で効率的な国民として「再生」させるために、帝国主義はさまざまな文化的装置を発明し、その身体管理の技術を洗練させていかねばならなくなる」と述べている。

このような歴史的経緯は、「肥満体恐怖症」を考察するに際して無関係なものではない。一九七〇年代の日本において国家的な解決を問われていたものは、経済の低成長による財政および医療費の圧迫であり、当時は「成人病」と呼ばれていたいわゆる生活習慣病の予防こそが重要な対策の一つに挙げられたのである。具体的には七八年に厚生省主導のもとで「国民健康づくり対策」が始まり、「生涯を通じる健康づくりの推進」、「健康づくりの基盤整備」、「健康づくりの啓蒙普及」を柱とした保健政策が展開された。この流れは八〇年代以降も加速し、「自覚と責任」という表現が登場する中で次第に、「自分の健康づくりに励むことが国民としての責任」とされ、「健康づくりに励まない人、不健康な生活をしている人は国民としての責任を果たさない人と見なされるようになる」³²状況が作り出されていく。

現時点から俯瞰すれば、この動向はやがて二〇〇三年に施行された健康増進法の基礎となったことが了解できるが、その結果は、健康の維持

と増進が自助努力と自己責任の論理によって覆い隠された面が強い。この法が「権利としての健康について」全く触れていない一方でひたすら「国民の責務」を唱えている点を指して、「健康であることが親や国家に対する義務」とした明治期の訓導、大戦期の健康報国運動を思い起こさせるような内容である^④という指摘も存在する。

こうした国家的な思惑が巧妙に個人の健康へ絡んでいった時期と、「食」や「運動」にまつわるダイエット・ブームの時期が一致することは必然的でもあった。つまり、帝国主義時代における健康的な身体を求め人々の所作は、幾度も変奏されながら現在にまで生き永らえていると言えよう。食事改善と日常的なトレーニングの結晶である女性ボディビルダーの身体は、国家的な要請と個人的な欲望を見事に一致させ、さらには当人の意図にかかわらず、従来の女性性に対する眼差しを背負い込む役割（健康美^⑤）までをも果たしてみせたのである。

四 一九八〇年六月の「肥満体」

前章の注釈を踏まえると、「肥満体恐怖症」で度々用いられていた奇妙な比喩も、途端に意味を持ち始めてくることが分かるだろう。これは水木、岡井、梶本の太った女性三人が占拠する「肉の帝国」、ファシズム政権になぞらえられた「肥満主義政権」、水木のあだ名である「アイヒマン（アイヒ満）」、そして唯子が自らをイメージ付ける「アウシュヴィッツの可哀そうなユダヤ人少女」といった、ナチスが支配体制を掌握した第三帝国に関連付けられる一連の比喩のことを指している。ナチス・ドイツは、頑健な兵士と生産性の向上を目的として、国民の食生活へ積極的な啓発を行ったが、次のような資料はまさに先述した七〇年代以降の日本の状況と置き換えても通用しかねない内容となっている。

自壊する帝国、世界にのさばる身体

たとえば一九三〇年代半ばのヒトラー・ユーゲントの手引書『正しい食生活で健康に』を見ると、「肉の食べ過ぎで病気になる」という朱刷りの表題のもと、まるまる一章がこのテーマに費やされており、「実体のないカロリー食」の危険を論じ、肉に代わる健康な蛋白質として大豆を勧めている。また手引書は繊維の多い全粒パンを推奨し「休む者は錆びる」というスローガンとともに便秘の予防を訴えている。少年エリートたるヒトラー・ユーゲントへの教えは、栄養は「個人の問題ではない」、帝国の少年少女は「健康でいる義務がある」、正しい食生活が健康な国民と兵士を作る、というものであった^⑥。

加えて、ナチスはタバコも国民の健康に甚大な影響を及ぼす害悪と見なし、制限の対象とした。タバコに関してはジェンダーの要素が作用し、「神聖で繊細」な身体を持ち、その第一の義務に「子供を産み育てる」ことを強要された女性たちに対する介入は特に強かったと考えられている^⑦。日本ではやはり一九七七年頃より嫌煙運動が盛んとなる。これは以前より存在した禁煙運動との共通基盤を「タバコの有害性から出発する点^⑧」に置くことで、相乗的な運動効果を高めていく性質を有していた。また、当時の嫌煙運動には「他人の前で平気で口を動かし、鼻から煙を吐き出す漫画的仕草の、どこに高い教養、将来母となる女性の責任が見出せるであろうか^⑨」と、女性性に基づく批判が存在した点も注目すべきだろう。こうした史実を組み合わせれば、肉食やタバコと並んでナチスの比喩が物語に類出する「肥満体恐怖症」は、同時代の日本において繰り広げられた健康とジェンダーをめぐる熱狂を、迂遠な形で圧縮した構造と見なすことが可能となる。

そうであるならば、唯子が水木たちの支配をナチスに喩えながらファシズム呼ばわりする行為は、本来の意味からすると完全に倒錯しているのが判明する。「肥満体」であることを常に寿ぎ、一切の遠慮も無くタバコを吸い続ける水木たちの振る舞いは、ナチスから七〇年代以降の日本に通底する「健康美」の道徳を違反する作法としてまさに鍵を握るものだからだ。

もちろん、自らを「ユダヤ人少女」の立場に置く唯子の語りは、そうした水木たちの不健康な姿勢を排斥するための正当化を構成する営為であって、実際には根拠を持たないことも明らかとなる。その証拠に、最初はまずく感じていたはずのタバコの味が、何度か口にしたことで美味しさを覚えるまでに唯子の身体感覚は変化している。この変化は物語の結末において、唯子が「肥満体」へ取り込まれる展開を暗示させる重要な伏線ともなっている。

ここで唯子の正当性を突き崩す役目を担うのは、元ルームメイトの永原である。永原は寮を抜け一人暮らしを始めてからタバコを吸い、太り出す。「どこか不健康な印象」(一〇三頁)を相手に発見した唯子は、原因を「不規則な生活をしてる」(一〇四頁)からではないかと推理し、寮の規則的な生活が学生に健康的な恩恵をいくらか与えていることに気付く。しかしこの時点では思い当たっていないようだが、それでは寮で暮らす水木たちが肥満している理由を説明できないことも確かではないだろうか。

そもそも唯子は当初より、「あの大女たちは生まれた時から太っており死ぬまで太ったままなのだ、と何の根拠もなく決めつけていた」(八七頁)。唯子の周囲でタバコを吸い、「肥満体」の条件を満たす女性は水木ら三人だけである。つまり、唯子はこの三人を基準にすることで、タバコを吸う女性、あるいは「肥満体」の女性を、醜悪な人格を持つ存在だと認識

していたと考えられる。だが、永原のようにそれまでこれらの要素と無縁だった一人の女性が、タバコを吸い、肥満していく過程を見せられることで、唯子は「肥満体」と人格の間に想定していた関係性を見失う。さらに物語が進むにつれ、自身もタバコに馴れ親しんでいく事実がそこに含まれていることは言うまでもない。

すなわち、唯子は喫煙と飽食を是とする「不健康」な身体——「肥満体」の何が悪徳であるのかが証明不可能な事実をようやく認め、結末にてその「一人芝居」(二二三頁)に幕を下ろすのである。彼女たちを敵味方に振り分けたものの正体とは、「不健康」な身体を敵視する同時代が引いてみせた境界線に他ならない。本作が秀逸であるのはそうした二項対立の内、排斥される側の素朴な違和感(もしくは「正常」と見なされる価値観への反逆)を活写するのではなく、排斥する側の主観に語り手を置いたところから物語を始め、「帝国」の正当性を自壊させた点にあるだろう。

また、これまで述べてきたように本作の「肥満体」とは同時代的な排除と統治の対象であり得つつ、同時に、身体にまつわる女性性を核とする母と娘の相克が発生する場としても依然機能している。というよりも、妊娠する女性の身体は、「将来の母」という意味合いにおいて「健康美」の帝国が紡ぎ出す身体の終着点に規定されている以上、二つは表裏一体なのである。女性身体に要求された矛盾は、否が応でも噴出せざるを得ない。

これに対して風呂場で華麗にポーズングを取る水木の「肥満体」は、異なる立場を取る。国家的な計画のもと目指された「健康」とも、異性愛主義が反映された「美」ともずれ、また妊娠した状態でもない女性の姿がそこには現れている^④。それでも太った様相が女性の妊娠へ仮に結び付けられるというならば、そのような身体の形状をあえて突き詰めることで、当初に想定されていた物質性^④に対する問い直しが可能になったと

強調する必要があるだろう。このことについても、本作は別の箇所での対応が仕組まれている。

太った女は目立つのだった。無視しようとするほど、際立って現れて来る。それに対して、太った男というのはいないも同然だった。男は男であるというだけで、太った男も痩せた男もないのである。唯子にとって、人間を分類する観点はふたつしかないようだった。即ち、太った女と、太った女でない者と。(九七・九八頁)

唯子の目前に出現した水木の裸体は、まさにこの基準によって分類されなければならぬ。生物学的な観点に倣った「男女」とは全く異なる人類の分類法だけが、「大蝸になり海蛇になり鯨になり亀に」(九〇頁)なるような水木の身体上で起こっている過剰な出来事を、部分的にでも理解させてくれるからである。こうした身体を前にした時、人はそこに目を奪われる以外何もできないことを本作は示唆している。

ただ純粹に見ることを強いられる身体、そのような存在の一端は、先にも触れたユージン・サンドウを対象に撮影された、わずか一分足らずの初期映画作品『怪力男サンドウ』(二八九四年)で確認することができる。映画に物語性が付与される以前の時代において、制作者トーマス・A・エジソンがこのボディビルダーを記録に残した動機の一つには、人々の視線を惹き付けてやまない身体の躍動そのものに対する形容し難い畏怖と感嘆が、少なからず潜んでいたのではないだろうか。そんなサンドウの活躍から約一〇〇年越しに水木のポーディングを見据える唯子は、男性の筋肉が放つ魅力とは、また別種の身体性への衝動に駆られているに違いない。彼女が目撃したものは、単純に筋肉を贅肉へ裏返したただけの状態ではなく、まさしく「女の肥満」が「世界にのさばろうとする」

(九七頁) 瞬間であったはずである。

以上のような解釈の維持によって、他ならぬ松浦自身が「病んだ状態を示すことば」と説明した「肥満体」は、同時代——一九八〇年六月の日本における女性身体に込められた文脈を再編成する表象に変化するだろう^⑧。換言すると「肥満体」とは、この時期を除いてはおそらく発現しなかった新たな言葉の用法なのである。

一九八〇年六月には、一体何が起こっていたのだろうか。それは、鈴木その子がベストセラーとなる食事改善のダイエット本を出版した月であり、西脇美智子がパワーリフティング選手権大会で華々しいデビューを飾った月であり、そして松浦理英子「肥満体恐怖症」を掲載した雑誌『文學界』が発行された月であった。以上の同期する現象を偶然の一致で決して終わらせてはならない理由は、本論がこれまで述べてきた通りである。

注

- ① 松浦理英子「あなたは女子プロレスを観たか」(『優しい去勢のために』ちくま文庫、一九九七年二月、二六頁)。
- ② 松浦理英子「(真実) もまた消費されるのなら」(『現代思想』第三〇巻第三号、二〇〇二年二月、一八三頁)。
- ③ たとえば亀井好恵『女子プロレス民俗誌—物語のはじまり』(雄山閣出版、二〇〇〇年八月)、合場敬子『女子プロレスラーの身体とジェンダー規範的「女らしさ」を超えて』(明石書店、二〇一三年三月)など。あるいは八〇年代において既に松浦が述べていたように、そうした技芸の中で独自の「カッコよさ」を発露する女子プロレスの魅力を重視するならば、プロレスラーたちが試合において解放する「力」が、「ジェンダー以前の興奮」に結びつく発想など(千葉雅也「力の放課後——プロレス試論」(『NEW WORLD』「新日本プロレスワールド」公式ブック)新潮社、二〇一六年六月、七三頁)とも呼応するかもしれない。

- ④ 松浦理英子「あなたは女子プロレスを観たか」前掲、二五、二七頁。
- ⑤ 松浦理英子「性器からの解放を」(『優しい去勢のために』前掲、八四・八五頁)。
- ⑥ 松浦理英子「セックス・ギャング・チャイルドの歌」(『優しい去勢のために』前掲、二六〇・二六二頁)。
- ⑦ 松浦理英子「性器からの解放を」前掲、八五・八六頁。
- ⑧ 松浦は桐野夏生との対談で、女子プロレスを「クラッシュギャルズブームの、一九八〇年代半ばあたりから」見ていたと述べている(桐野夏生『対論集 発火点』文春文庫、二〇一二年二月、一三三頁)。
- ⑨ 初出は『文學界』一九八〇年六月号に掲載、後に単行本『葬儀の日』(文藝春秋、一九八〇年八月)、文庫本『葬儀の日』(河出書房、一九九三年一月)に収録された。本論での引用は、発表時の同時代性を重視する観点から、初出掲載のものを用いた。
- ⑩ 松浦理英子、川上未映子「性の呪縛を越えて」(『文學界』二〇〇八年五月、一七六頁)。
- ⑪ 荻原雄一「松浦理英子」論——誇り高きMの構図(『国文学 解釈と鑑賞別冊』一九九一年五月、一一九・一二〇頁)。
- ⑫ 与那覇恵子「松浦理英子 越境する性」(『国文学 解釈と教材の研究』第三七卷第一三三号、一九九二年一月、一二九・一三〇頁)。
- ⑬ デズモンド・モリス『ふれあい 愛のコミュニケーション』石川弘義訳、平凡社ライブラリー、一九九三年八月、三〇八頁。原著は一九七一年刊行。
- ⑭ 山崎真紀子「戦後日本における〈肥満〉文学」(『日本文学』第五九卷第一一〇号、二〇一〇年十一月、四二頁)。
- ⑮ 仁平政人「肥満体恐怖症」——〈母〉の変形——(清水良典編『現代女性作家読本⑤ 松浦理英子』鼎書房、二〇〇六年六月、四四頁)。
- ⑯ 仁平政人、前掲、四四・四五頁。
- ⑰ 仁平政人、前掲、四五頁。
- ⑱ 近藤周吾「逆ダイエットの効用——「肥満体恐怖症」——」(清水良典編『現代女性作家読本⑤ 松浦理英子』前掲、四一頁)。
- ⑲ 茂木信太郎『現代の外食産業』(日本経済新聞社、一九九七年四月)を

参照した。

- ⑳ たとえば海野弘『ダイエットの歴史 みえないコルセット』(新書館、一九九八年八月)に詳しい。
- ㉑ 「高くつく美容と健康」(『朝日新聞』一九七三年六月八日朝刊)。
- ㉒ 『朝日新聞』一九七五年三月四日朝刊。こうした夢のような数値を実現したのはひとえに人工甘味料の力である。だが、減少したカロリーは同時に危険をも引き連れてくる。安全性の面で問題ありと判断され、六八年にズルチン、六九年にチクロがいずれも使用禁止となり、七三年にはサッカリンも使用に規制がかけられるようになった。そうした事実を受けて八〇年前後に天然甘味料であるステビアの需要が増加する(以上の情報は『酒類食品統計月報』第二三卷一、一九八一年三月を参照のこと)。
- ㉓ 成実弘至「ボディの戦後史 グラマラスボディからプラスチックボディへ」(京都造形芸術大学編『モードと身体 ファッション文化の歴史と現在』角川学芸出版、二〇〇三年六月、一三六頁)。なお、戦前より続くアメリカにおける女性身体と健康美の関係については、原克『美女と機械健康と美の大衆文化史』(河出書房新社、二〇一〇年一月)に詳しい。
- ㉔ もちろん「肥満」と「運動」を関連付ける動きもこれ以前になかったわけではない。しかしその対象はもっぱら「肥満児」であり、たとえば一九六七年二月五日の『朝日新聞』東京版朝刊には、「君もスマートになれる」という記事の下に、校庭で激しいトレーニングに精を出す小学校児童の写真が掲載されている。あくまで「病態」の一つと把握されていた「肥満児」の存在を、大人たちのダイエット・ブームと同一視することは難しいだろう。
- ㉕ 加藤賢治「人間百景：ここに生きる／西脇美智子さん」(『週刊明星』第二三卷四七号、一九八〇年十一月、一四八・一四九頁)。
- ㉖ 「人物日本列島 西脇美智子」(『週刊宝石』第一号第三卷、一九八一年一〇月、一六五頁)。
- ㉗ 屋良光子「体験入門番外編 ウーマンズ・ボディビル」(『オール生活』第三七卷第七号、一九八二年七月)、西脇美智子「ミセスのボディビル入門」(『婦人倶楽部』第六四卷第九号、一九八三年九月)など。
- ㉘ 西脇美智子『ボディビル・マジック』講談社、一九八三年四月、一八頁。

- ②⑨ 荻野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房、二〇〇二年二月、三六一頁。
- ③⑩ 松浦理英子「性器からの解放を」前掲、八三頁。
- ③① 谷内田浩正「ポディビルダールたちの帝国主義——漱石と世紀転換期ヨーロッパの身体文化」(『漱石研究』第五号、一九九五年一月、六四頁)。
- ③② 谷内田浩正、前掲、六四・六五頁。
- ③③ 上杉正幸『健康不安の社会学(改定版)』世界思想社、二〇〇八年九月、一一一・一一二頁。
- ③④ 新村拓『健康の社会史 養生、衛生から健康増進へ』法政大学出版局、二〇〇六年一〇月、二四一頁。他にも、同様の指摘を一冊のテーマにまとめ上げた書籍に、林信吾、葛岡智恭『大日本「健康」帝国 あなたの身体は誰のものか』(平凡社新書、二〇〇九年八月)がある。
- ③⑤ 他者から評価される女性性と筋肉を鍛え上げる営みに伴う女性ポディビルダールの葛藤は、男性ポディビルダールのそれと比較して複雑な様相を見せている。本論でその深層を詳述する余裕は無いが、女性ポディビルダールの貴重な証言を記録した増田晶文『果てなき渴望』(草思社、二〇〇〇年七月)は重要な参考文献となるだろう。
- ③⑥ ロバート・N・プロクター『健康帝国ナチス』宮崎尊訳、草思社、二〇〇三年九月、一五三・一五四頁。原著は一九九九年刊行。
- ③⑦ ロバート・N・プロクター、前掲、二六〇頁。
- ③⑧ 黒木俊郎「喫煙の社会的問題点——反喫煙運動を考えるヒント——」(並木正義、平山雄編『喫煙の医学』講談社、一九八二年、一九六頁)。
- ③⑨ 嫌煙権確立をめざす人びとの会編『嫌煙権だより』第五号、一九八一年五月、三頁。
- ④⑩ ただし、あらゆる社会的制約や統治から逃れた完全な身体が成立することも、また考え難い。たとえば後年に発表されたマンガ作品である安野モヨコ『脂肪と言う名の服を着て』(祥伝社、二〇〇二年八月)では、男性の視線が女性身体を容易に性的な文脈へ縛り上げていく表現が続出する。この作品において、男性側は太った女性の身体に、物理的な「安心感」(肉体的な柔らかさ)や「外見じゃなく心で彼女を選んだ男」という自己評価の根拠などを求めており、その欲望如何によって女性身体の在りようが左

自壊する帝国、世界にのさばる身体

- 右されていくことが分かる内容となっている。身体が社会的な規定からの脱出を目論む際、それを再び包摂し、カテゴライズする側も巧妙な「進化」を見せるのである。このような事態が教えることは、文学的な想像力に身体のエートピア的状况を期待するのではなく、むしろ規範と逸脱の間で錯綜する不明瞭な身体こそを追い続ける必要性ではないだろうか。
- ④⑪ 身体は確かに一つの物質としてその輪郭を形作っているだろうが、同時に、あくまで特定の社会的な規制に基づき理念および規範によって産出された効果として受け止めることしか我々にはできない。身体の物質性についてはジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子訳、青土社、一九九九年三月。原著は一九九〇年刊行)、『Judith Butler, Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex", Routledge, 1993.』を参照された。
- ④⑫ 本論の「健康」にまつわる主要な視点は、次の論文にて紹介される「エピクロス派」の健康観から示唆を得たものである。「疫学が特定の利害に資するように操作されていないとしても、それはある総計の真実を述べているのだ。定義上、疫学はある特定の個人の死すべき運命やそれに伴う健康については何事も語らない。健康に関するエピクロス派の見解は、私たちが科学者たちのコホートに一致させるものに焦点を当ててではなく、私たちが還元不能な単一者とするものに焦点を当ててのである。私たちは、それぞれ遺伝的・歴史的なダイスの一振りであり、特異な強さや弱さ、個人の健康に責任を持つ唯一の義務を有してこの世に生まれたのである。要するに、エピクロス派にとっての健康は、科学的事柄というより芸術的事柄なのであり、生物学の問題というより美学の問題なのである。私たちはそれぞれ健康に到る独自の道を発見しなければならないのだ。そのためには熟練や、今日では科学的好奇心が必要となる。エピクロス派にとって、最初の好奇心は肉体に向けられる。たとえば、肉体の機能、快楽と苦痛に対する肉体の反応、など」(リチャード・クライン「健康とは何なのだろうか?」そして、どうしたら健康になれるのだろうか?」、ジョン・M・メツル、アンナ・カーランド編『不健康は悪なのか 健康をモラル化する世界』細澤仁、大塚紳一郎、増尾德行、宮畑麻衣共訳、みすず書房、二〇一五年四月、二七頁。原著は二〇一〇年刊行)。

【付記】引用における「／」は改行を意味し、その他の引用文献について、特に表記のないものは全て初版を用いた。

(大谷大学文学部任期制講師)